

〈私の研究〉

三国志ジエネレーション

伊藤 晋太郎

私と同世代の研究者の大方がそうであったように、私と三国志との出会いもやはりNHKの「人形劇 三国志」であった。小学四年生の頃だったと思う。武勇や謀略、歴史のダイナミズム、登場人物の多彩さ……。三国志の世界に大いに引き込まれた。

中学二年の時に最初の三国志ブームが来た。それはファミコンゲームに端を発したものであり、三国志に興味を持つ人が周囲に増えた。立間祥介先生による完訳本『三国志演義』を同級生と競って読んだのもこの頃である。

中学・高校で漢文の授業を受けると、諸子百家や漢詩などにも興味はひろがり、大学に入ってから「漢文」ではなく、外国文学の一つとして中国文学をとらえられるようになって、さらに視界が開けた。それでも大学の卒業論文のテーマに選んだのは三国志であった。大学院に進んで修士論文のテーマに選んだのもやはり三国志であった。留学中の恩師である四川省社会科学院の沈伯俊先生は、現在の研究テーマだけでなく、卒論も修論も三国志であったと知ってお笑いになった。自分よりも若いうちから三国志研究を始めているじゃないか、と。

とはいえ、後期博士課程に入ってからはいくくりと取り組める長期的な研究テーマを定められずにいた。中国文学専攻であるから、文学の三国志、即ち小説『三国志演義』に軸足を置き続けたい。しかし、どういう方向で研究を深めていけばいいのかわか。

転機となったのは中国四川省への留学だった。四川省は三国時代に蜀があった地域である。そこで指導を仰いだのが先述の沈伯俊先生であった。沈先生は中国における三国志研究の重鎮である。

中国では、学生は指導教授から与えられたテーマを研究することが普通である。私も沈先生から研究テーマを与えられた。それは関羽であった。

関羽、字は雲長。蜀を建てた劉備の義弟であり、武勇抜群の活躍を見せた忠義の武将である。立派なひげが彼のトレードマークとなっている。三国志の他の人物と大きく異なるのは、後世に神として祀られ、現在に至っても広く中国人から崇拜されている点にある。そしてそれゆえに高い研究価値があるといっている。

しかし、それだけ大きな存在である関羽を研究していくとなると、実に幅広い知識が必要になる。歴史学・哲学・宗教学・民俗学・文学……。文学だけとってみても、多くの知識人が関羽を讀えて作った詩文、関羽にまつわる伝説を伝える文言小説や『三国志演義』等の白話小説、関羽を主人公にした演劇や語り物など、様々なジャンルに目配りしなければならない。

これは手に負えそうにない。そう思って別のテーマにしたいと抵抗を試みたが、先に述べた如く、今後の研究テーマを定められないでいたわけだから、にわか作りの対案では沈先生を納得させられない

かった。もはや白旗を揚げる外なかった。

けれども、実際に手をつけてみて、関羽を研究することは中国、および中国人を理解するために極めて有効な手段となることに気づいた。関羽研究が様々な学問分野にまたがるということは、関羽を通して中国の思想や文化など様々な事象を見ることができるということである。しかも関羽崇拜の普及は『三国志演義』とも密接に関わっているので、『三国志演義』から離れることもない。次第に関羽研究が面白くなってきた。

そこへライバルが現れた。福建の大学で学ぶ一歳年下の女性でしさんといった。同じく関羽を研究テーマにしているということで、沈先生に紹介された。といってもお互いの住む場所は遠く離れている。交流はメールのやりとりのみだった。

半年後くらいに、しさんと直接会う機会が訪れた。出張する沈先生のお伴をして彼女のいる福建の大学を訪ねたのである。大学側主催の宴会の後、彼女は私を自分の部屋に誘った。別に読者諸賢が期待するようなことは何もなかった。ひたすら研究内容について意見交換しただけである。事々に私の見解を問うてくる彼女の厳しい姿勢にたじたとしたものだ。実際に会ってみて印象が良かったのか、四川に戻ってからしばらくはメールの量が増えた。ほとんどチャットのようにやりとりした晩もあつたくらいである。

そんな彼女は順調に博士論文を書き上げ、それを出版してすでに帰国していた私に送ってくれた。数年前に結婚し、お子さんもいると聞き及んでいる。常に先を越されてしまっている。

私の方は帰国までの間に『風月錦囊』という戯曲選集に収められ

た三国劇における関羽像についての論文を四川省社会科学院の紀要に発表し、その時に生じた関羽と貂蟬の關係に対する疑問から、帰国後に「関羽と貂蟬」という論考を発表した。最近は関羽崇拜の高まりにともなって元代以降に数多く出版された「関羽文献」とも称すべき文献に取り組んでいる。これからも留学以来積み上げてきたものを大切にして研究を続けていきたいと思う。

数年前の雑誌記事に、最近三国志ものの漫画がたくさん出版されたり、三国志ネタを持つお笑い芸人が出てきたりしているのは、三国志が身近にある環境で成長した世代が、自分なりに三国志を世間に向かって表現できる年齢になったからだ、という指摘があった。

これらの漫画家や芸人達は現在三〇代〜四〇代前半であり、私と同世代である。私は研究の道に進んだが、研究として自分なりの表現にほかならない。我々のように三国志の中で成長してきた世代は「三国志ジェネレーション」とでも名付けられよう。今後、「三国志ジェネレーション」が学界と世間の壁、日本と中国の感情的せめぎあいの壁を越えていく可能性を感じるし、そうあるべきだと思う。私も関羽研究、三国志研究によってそのために微力を尽くす所存だ。